

園番号 615

令和7年度 奈良市立富雄北幼稚園 研究実践概要

園長名	杉浦 順子
全園児数	23名

1. 研究主題

豊かな心をもち、意欲的に活動する幼児を目指して
～ 身近な環境とのかかわりを通して ～

2. 研究年度 2年度

3. 研究主題設定理由

本園は住宅地の中にあるが、核家族や少子化のため地域との接点も少なく、入園するまでは家族中心の生活で温かく見守られていることが多く、生活体験や人とかかわりが希薄になってきている。幼児期に自分の思いを出しながら思い切り友達と遊ぶ楽しい体験や、思いをいろいろな方法で表現する体験等の生活体験が不足している。

そこで、身近な環境（ひとやもの、もの）とかかわりを通して、生き生きと活動できる環境や援助の工夫をして、意欲的に活動する幼児を育てたいと考え主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

幼児が身近なひと・もの・ことに自発的にかかわって遊ぶ中で、発見・感動・探求等の経験を繰り返すことを通して、「幼児教育において育てたい資質・能力」を育むため、それぞれの発達の過程と、子ども達のその時々々の興味に合わせた環境（物的・人的）を探り、子どもと共に遊びを創造する。

②研究の重点

- ・研究主題について共通理解をし、課題を元に指導計画を見直し、立案して実践する。
- ・園と家庭・地域・小学校との連携の充実に努め、地域の教育力を活かしながら幼児が様々な人と触れ合い、豊かな体験ができるような日々の保育内容の工夫に努める。
- ・幼児が安心して園生活が送れるように、保育者が一人一人の実態を把握して、発達を促していく。
- ・幼児が遊びや生活の中で自ら身近な“ひと・もの・こと”など周囲の環境とかかわり、体験することを通して主体的・意欲的に活動する姿や深い学びにつながる環境の工夫や援助を探り、幼児理解に努める。

③活動の方法

【事例 1】「アイドルになるために…」 4歳児 10月
(ねらい) 自分のしたい遊びを十分に楽しむ

保育室で、運動遊び参観(運動会)で踊った曲をかけ、ダンスの曲を口ずさんでいたり友達と一緒に踊ったりする子ども達(アイドルの曲を使って踊りました)。保育者が「アイドルが来たよ～」と友達が踊って遊んでいることを周りに伝えると、それを見た友達が「アイドルはもっとかわいいの付けてるで!」と教えてくれました。アイドルになりたい子ども達は、アイドルに必要な物って何だろうと考え「リボンつけたらかわいくなるな」「服もかわいいの、スカート着てるで」と言って、アイドルの衣装づくりが始まりました。つくった衣装を着てみると思っていたのとは違うようで、何度も試着を重ねながら納得いくまでつくっていました。できあがった衣装を着て歌うことを楽しんでいましたが、「アイドルってコンサートもしてるで」と言い、「コンサートにはお客さんがいるな」「お客さんとアイドルの間に柵があったような・・・」「マイクもってる」「ライトもってる」「うちわもいる」とどんどん意見がでてきて、あれもこれもと今度はグッズづくりが始まりました。「アイドルってたいへんやな」「つくるのいっぱいあるな」「何色が良いかな」「〇〇はピンクやねん」と言いながらも楽しそうに取り組んでいました。できた衣装やグッズを身に付け、アイドルになりきって嬉しそうに楽しんで歌い踊る姿があり、そこには、うちわをもって応援するお客さんの姿もありました。アイドルのコンサートは保育室だけでなく園庭でも何度も開催されました。



<考察>

以前からアイドルごっこを楽しんでいたが、今回、友達の言葉から衣装やグッズづくりに取り組むことになった。保育者がさまざまな素材を準備したり、コンサートのイメージが浮かびやすいようにペンライトなどを用意したりしたことで、子ども達一人一人がもつイメージ通りの物をつくる事が出来たように思う。

普段、テレビやYouTube、TikTokなどで見ているアイドルに自分になるために、衣装やグッズを自分たちが自ら考え思いを込めて作り、身に付けたりもったりしたからこそ、みんなの前で踊ることが楽しいと感じ、満足感につながったのではないかと考える。

【事例 2】水をちょっとってどれぐらい?? (5歳児 6月)

(ねらい) 共通の目的をもった友達と考えを出し合いながら、積極的に遊びを進めていく。

昨年の経験を思い出しながら水と石鹼を使って泡遊びを楽しんでいました。最初はボールに石鹼と水を入れて泡ができることを喜んでいましたが、次第に、友達の泡を見てフワフワの泡をつくりたい、絞り袋で絞れる泡をつくりたいと目的をもって泡づくりを楽しむようになりました。

A児「フワフワにならないな。どうすればフワフワになる?」B児「水が少なすぎるんじゃない?」そこでA児が水を少なく入れたのにフワフワにならず、うまくいかない、どうしてだろうと考えていた。「フワフワの泡をつくるには水をちょっとだけ入れたらいい」と分かったものの、ちょっとすぎるとだまになってしまいました。そこで、保育者は「ちょっと」という抽象



的な言葉が泡づくりを難しくしているのではと考え、みんなで“ちょっと”とはどれくらいなのかを話し合う時間をつくりました。「“ちょっと”ってどれくらいなのか・・・」「スプーンで計ってみたいんじゃない？」と意見がでました。そこで「じゃあ、スプーンで何回入れたらいいか数えてみよう！」となりました。3回水を入れて無理やったから2回入れて・・・と何度も挑戦していました。「今度こそフワフワの泡をつくりたいな」と繰り返す中で、「石鹸3回と水3回入れたらフワフワの泡できた！」とフワフワの泡が出来たことをみんなで喜び、その顔は満足げでした。



<考察>

友達の姿を見て同じ泡をつくりたいという思いをもち真似をする姿が見られたが、うまくいかず泡づくりを諦めそうになる姿もあった。“ちょっと”という抽象的な言葉が泡づくりを難しくしているのではと考え、みんなで“ちょっと”とはどれくらいなのかを話し合う時間をつくることで主体的に考え取り組もうとする姿につながったと考える。

また、話し合いの際、生活（お母さんの料理をしている姿）を思い出したり、保育の中で取り入れてきた身の回りにあるもの（スプーンや計量カップ等）を使ってみたりすることが意見に出て、“ちょっと”が具体的になったことで諦めそうになっていた泡づくりを前向きに取り組む意欲につながったと考えられる。抽象的な言葉を、現実的なものに置き換える方法を子ども達自身で得る良い経験となったのではないかと思う。

【事例 3】化石？隕石？？（5歳児9月）

（ねらい） 友達とイメージを共有して、役割分担しながら積極的に遊びを進めていく。

砂場で見つけた石をたくさん集めていた子ども達。「これ隕石じゃない？」「恐竜の化石みたいやで」と調査隊ごっこをしていました。いろいろな形の石を見つけたから調べてみたい！と保育室に持ち帰り、虫めがねで観察すると「よくみたら色がちょっとちがう」「とげとげしてる」「線みたいのがある」と石のもつ色の美しさや面白さを感じていました。また、化石や石の種類の本や、保育者が貼った化石や石の種類の表を見ながら「これ、恐竜の歯じゃないかな？」「この石はどの石と一緒にかな」などと比べる姿がありました。



保育者が、「調査するってどんなことするの？」と聞いてみると、「研究所で調べるねん」。「研究所には何があったかな？」と聞いてみると「パソコン」「重さ図るやつ」「ドローンで」と言い、それぞれにイメージする物をつくり始めました。秤では天秤をつくり支点をどこにすればよいか何度も試しながらつくり、パソコンやドローンは実際に見たことのあるため、思い出しながらつくりました。できあがると「これで調査できるね！」と満足し、研究所がオープンしました！



<考察>

身近にある“石”から化石かな？隕石かな？と想像して遊ぶ姿から、保育者がすぐに子ども達の興味に気づき、化石や石の種類の写真を表にして石を置いている前の壁に貼り見比べたり同じ

種類の石を探したりできるようにしたことで、石を集めて虫めがねで見て終わりではなく、石への興味が持続するとともに、調べてみたいという子ども達の思いから研究所のイメージを引き出し、遊びが継続し発展したのではないかと考える。

子ども達の遊びの中で生まれる興味に対して、保育者がすぐに気づいて遊びのヒントを準備することで、石との出会いという部分が主体的に活動する姿に大きくかかわっていたように思う。

5. 研究の成果

子ども達は、日々様々なことに興味をもち、それぞれが「もの・こと・ひと」に関わり試している。日頃繰り返し楽しんでる遊びが、ふとした偶然がきっかけとなり新しい遊びへと少しずつ形を変えていく。保育者は、今子どもが何を見て何を感じ・考えているのかを多角的にとらえ、気持ちに寄り添い、遊びの一員となって共感することが大切であり、そうすることで、子ども達の主体性や創造性を傍らで感じることができる。

今年度の実践から、子ども達の遊びが深まっていくときに、「こうしたい」という思いがあって、実現ができにくい時にこそ、子ども達のイメージを身近なものに結び付けていくきっかけや、子ども達が、「やってみたい」「つくってみたい」と思っていることをどのように進めていくかなど、保育者が小さなきっかけを投げかけることで、子ども達が自分たちで考え、主体的に取り組もうとする姿につながったと思う。

また、「やってみたい」は、現時点での遊びからだけでなく、これまでの子どもの経験に裏付けされたものからも生まれることを感じさせられた。

保育者一人一人が、子ども達の生活や遊びの様子をしっかりと見取り、職員間での話し合いを重ね、子ども達が心動かし遊び込める環境を工夫し続けることで、また新たな「やってみよう」「またしたい」が生まれることを改めて感じた。

6. 今後の課題

子ども達は生活の中で、様々なひと・もの・ことに関わって成長していく。保育者は、幼児の一つ一つの言葉や行動の意味を見極め、カリキュラムに沿って、どのような成長の過程にあるかを読み取っていく必要がある。今後も幼児が主体的に活動できる援助や環境構成のあり方を探り、計画・実践・評価反省を繰り返し保育の質を高めていけるよう努めていきたい。